

模擬授業 Ω(オメガ)		
番号	担当者	模擬授業タイトル
① 11:00-	教授 中山 俊宏	トランプ現象の底流
<p>アメリカではトランプ旋風が猛威を振るっている。これはトランプという個人をめぐる現象なのか、それともアメリカ社会の底流で何か得体の知れないものがうごめいていることの表象なのか。アメリカが大きく変容し、世界に向き合う態度が変われば、もはや日本にとっても他人事ではない。本講義では、日米関係も視野に入れつつ、トランプ現象の底流を考察する。</p>		
② 11:00-	准教授 長谷部 葉子	なぜ今「異言語・異文化コミュニケーションが重要か？」 -英語を超えたその先に見るコミュニケーション-
<p>— 隣人から口永良部島、そしてコンゴ民主共和国をつなぐコミュニケーションの力 — 隣人、都市部と離島、日本と地球の反対側のコンゴ民主共和国、コミュニケーション、一見何の関連性もない3つの関係がどのように相互作用を生じ、新たな社会、さらには世界をつなげる持続可能な関係性構築を実現するのか、その先に目指すものは何なのかを共にイメージする「場」です。</p>		
③ 12:40-	教授 田中 浩也	ファブ地球社会の目指すもの 【デザイン言語講座】
<p>2016年、SFCは「ファブキャンパス」を掲げました (<a href="http://fabcampus.sfc.keio.ac.jp">http://fabcampus.sfc.keio.ac.jp</a>)。 これまで培ってきたデジタルやインターネットの力を、3Dプリンタ等を用いて、さらに実世界の「モノ」と結びつけて、新しいモノやサービスをつくり、それによって地球上のさまざまな問題を解決していきます。 そのジャンルは看護から建築まで本当に多岐にわたります。この講座ではその具体例をお話します。</p>		
④ 12:40-	教授 三次 仁	Software Defined で行こう！ [コンピュータとネットワーク講座]
<p>Software Definedとは、従来ハードウェアで構成していた機能を、ソフトウェアで実現することです。おもしろいのは、ソフトウェアを入れ替えることによって一つのハードウェアを状況に応じて、全く違う機器として用いられることです。Software Defined技術を平易に解説するとともに、Software Definedという考え方が、身近な機器をより便利・効率的に使うためにも重要であることを紹介します。</p>		
⑤ 13:30-	教授 古谷 知之	ドローン社会の衝撃
<p>皆さんはドローンに対してどのようなイメージを持っていますか？ 首相官邸などでの落下事故が報じられていたので、危険な印象を持っているかもしれません。しかし、医療や農業など、幅広い分野でドローンが活用されることが期待されています。産業用ドローンは2020年頃には米国で1.2兆円、日本でも100億円程度の市場規模になるとの予測もあります。 SFCでは、ドローンが自動車やスマホのように普及する「ドローン前提社会」の到来を想定して、「ドローン社会共創コンソーシアム」を創設し、ドローンやロボティクスに関する研究・教育・社会展開を進めています。この講義では、皆さんに「ドローン前提社会」を感じてもらいたいと考えています。</p>		
⑥ 13:30-	教授 渡辺 光博	SFCから健康長寿を実現し、世界のみんを幸せにする！！—バイオと健康の接点—
<p>SFC健康系分野のバイオの中でも、我々は老化の視点で世界の健康長寿実現に向けて実験研究を推進している。現在人々の多くを苦しめている疾患の多くは老化が最大のリスクファクターであり、老化による代謝の衰えをいかに制御するかが重要である。現在、概日リズム、腸内細菌、胆汁酸、癌、老化、精神疾患、認知症、食生活等、様々な分野に着手している。SFCでは、学生達に単に知識だけではなく新しい概念を自ら創出し、多くの人類に幸福を教授することに喜びを見いだしたいと思っている。また、単に研究のための基礎研究に溺れることなく、社会応用を常に見据えた研究を行うように教育を行っている。授業では、日頃の我々の研究成果を高校生諸君にも分かりやすく講義したい。</p>		
⑦※ GIGA 14:20-	教授 小林 博人	Why self-build?
<p>People can develop a strong connection to their environment by participating in its design and construction. Self-build methods help create an intimate relationship between the building and the user, and foster a strong sense of ownership. The collaborative construction process can also bond a community together; especially those which are struggling to recover from a disaster. In the introductory class, two self-build case studies will be shown. One is the Student-Build Campus project at SFC, and the other is the Veneer House project conducted by Kobayashi Lab. These two examples show the importance of hands-on involvement in helping students to approach projects as a matter of personal concern and conviction. The Miraisozojuku (Institute for Designing the Future) Student-Build Campus (SBC) is based on the concept that students, faculty members and staff can join forces to plan and realize a residential education and research facility with their own hands. This challenging project is part of SFC's effort to build a "Student-made Campus of the Future," an expression of the university's culture of experimentation. Commitment to the planning and construction process will forge a sense of attachment to the new campus and the future of the university. The Veneer House Project began as a response to the 2011 Great East Japan Earthquake. This building system uses prefabricated plywood panels to expedite and simplify construction, allowing disaster stricken communities to quickly respond to their own needs. The first Veneer House was completed in northeast Japan in 2012. Since then, Veneer Houses have been constructed in Japan, Myanmar, the Philippines, and Nepal. The structural frame can be easily erected in collaboration with the local people. Indigenous materials are used to create an exterior that complements the surrounding context, which strengthens the local community's sense of ownership of the building.</p>		